国際森林年企画「白神を考える旬間シンポジウム」と「森を歩く集い」の開催について

局長挨拶

東北森林管理局は、毎年９月上旬を「白神山地を考える旬間」として、白神山地に関する各種行事を集中的に行っております。

今年は、国際森林年企画として、東北森林管理局主催により９月１０日（土）に「白神を考える旬間シンポジウム」を、また、翌１１日（日）に「森を歩く集い」を開催しました。

シンポジウムは、弘前市の弘前市総合学習センターを会場に、「変化する白神山地の自然を探る」をテーマに、気候（気候変動）、植物（森林生態系）、動物（鳥類、猛禽類）に焦点を当てて、後世に残す自然遺産としての価値やその保全管理手法ついて、学識経験者３名による講演を行いました。当日は、地元住民のほか、大学生や白神山地のガイド関係者など約１２０人が出席し、地元の住民と知見を共有しました。

講演の様子

１０日のシンポジウムでは、早稲田大学の森川教授から、多くの緑化プロジェクトが行われている現状等が紹介され、自然科学だけでなく人間科学にも基づいた環境保全のシステムの重要性について詳しく説明されました。東北大学の中静教授からは、白神山地での長年のモニタリングの結果をもとに、これまでのブナ林の変化を紹介し、今後のブナ林の変化について他地域の事例などを用いてのシミュレーション予測結果が披露されました。また、岩手県立大学の由井名誉教授からは、白神山地やその周辺におけるクマゲラやイヌワシの営巣や繁殖の実態等が紹介され、ヘビなどの餌となる動物の変化や、地球温暖化などによる影響の可能性を示唆しつつ、列状間伐の導入等による採餌環境の向

意見交換の様子

上対策の必要性が述べられました。会場からは、ブナの害虫ブナアオシャチホコの他地域の被害状況やブナ林を守るためなどにササを刈り払うことの是非について情報交換や意見がだされました。

暗門の滝コースの様子

また、１１日（日）の森を歩く集いは、国連の定める国際森林年の国内テーマ「森を歩く」にちなみ、実際に一般の方々に白神山地を歩いてもらい、自然遺産の価値を散策しながら体感していただけるよう、①暗門の滝、②高倉森などブナ林（青森県西目屋村）、③田苗代湿原と岳岱自然観察教育林（秋田県藤里町）の３コースに分かれて開催されました。

高倉森などブナ林コースの様子

なお、この企画には、青森県や秋田県内外から一般参加者や関係者など約６０人の参加がありました。

当日の青森県は、朝から雨というあいにくの天気で一部行程の変更がありましたが、地元でガイドを行っているマタギの工藤光治氏、工藤茂樹氏らの案内により、参加者はマザーツリーやふれあいの道などのブナ林を散策し、ブナの森が雨を蓄える機能や樹幹を流れる雨の様子を観察しました。また、秋田県側では、天候に恵まれ、藤里町で自然保護活動を行っている鎌田孝一氏の案内により、参加者は田苗代湿原、岳岱自然観察教育林のブナ林のおいたちなどに耳を傾けながら秋の白神山地を満喫しました。

田苗代湿原と岳岱コースの様子